

故きをたずねて

昭和二十三年以来十年に余る歳月を過ごした北国美唄を偲びつつ、想い出の短歌を送ります。

道歯会の皆様のご健闘を、はるか四国から祈ります。

満州で終戦を迎える。

祖国敗れ満州國ここに崩壊す

還り得べきや我が故郷へ

蒋介石軍軍規厳正なり八路軍も

これに劣らず吾れ啞然とす

終戦後幾日を経ずに、大空挺部隊で重慶から蒋介石直系軍が新京に大挙進駐して来た。軍服装備すべて米式の兵士は日本人二世の米軍の如く映るため眼を見はる事有り。眼とすれば満州にいる心地して

ああ満州は忘れかねつも

終戦前の満州は日本人には王道楽土であった。

終戦後三井美唄の炭鉱病院に奉転する。

我ら住む美唄の冬は春遠し 眞白く雪は降積りたり
十年余り住みし炭山を去る感深けれど

静かにあらむ定年退職時に

見送りの人のうしろになびきける

美唄原野のひとひらの雲

ひそかに去ろうとしたが多勢の見送りの人達、湧き上がる感傷を抑えるには新生活の空を心に描き続ける丈けであつた。

雪深き北の國よりさすらいて

新らしき土地に感深き我

眼とづれば美唄に住める心地する

讃岐のたつきに馴れし今はも

頬あつき追憶の日よ黄昏て 島影暗き瀬戸の内海
さすらいの文字さながらの生活して

讃岐路の春に吾老いんとす

老いぬればかにかく恋し故郷は

赤き柿の実繋梯の山

身知不柿は会津名物

ひとすじにただひとすじに書き残し

哀しきいのち終らんとする

元美唄歯科医師会副会長 石原利男